

(身辺雑記 3)与謝野晶子の堺を訪ねて

法事があって大阪まで行った。かねてネットで、与謝野晶子とアルフォンス・ミュシャを常設展示している堺市立文化館というものの存在を知り興味を持っていたので、よい機会と思い、堺に宿を取って、翌日そこを訪れることにした。

都道府県で言えば、堺も大阪府だが、大阪市内も北のほうで生まれ育った私にとっては、堺自体がほとんどなじみのない所なので、堺市役所の最上階が一般に開放されていると聞き、上って見た。仁徳天皇の有名な前方後円墳が、文字通りの形で見られるのかと期待したが、最上階と言っても21階程度では、周囲の木々にさえぎられ、形を窺う由もなかった。よく本で見かけるのは、航空写真によるものなのだろう。

さて、表題に掲げた与謝野晶子であるが、私が最初に彼女の作品と出会ったのは、小学校高学年の頃で、何で見たのかは定かでないが、有名な「君死にたまふことなかれ」の詩である。これは、日露戦争の最中に発表されており、その勇気に大変感動したことを今も覚えている。

私は短歌をとりたてて勉強したわけでもないのに、歌人としての彼女の評価が、関係の世界でどのように定まっているのかは知らないが、10人を超える子を産みつつ、生涯に5万首の歌を残したとも言われているから、それだけでも驚嘆に値する。

更に加えて、多彩な評論活動、「源氏物語」の現代語訳、文化学院を中心とした教育活動などなど、実にエネルギーで、六十余年の生涯に何人分もの仕事をした正に「巨人」(女性にはあまり似つかわしくない表現かもしれないが)と言うべきではないだろうか。

しかし、堺市立文化館は、JRの「堺市」駅から至近の便利な立地であるにもかかわらず、期間限定の企画展ではない故か、エレベーターで展示階に降り立ったら、余りにもフロア全体が森閑としているのに驚いた。おかげで、落ち着いて見ることはできたが、女の子が生まれたら「晶子」と名づけようと思ったこともあった(実際には男の子だったが)ほどの、与謝野晶子ファンとしては、ちょっぴり寂しい気もした。

ミュシャの展示は、晶子の展示の上の階にあって、観覧料は共通になっている。ミュシャの作品を目にしたのは、大人になってからだが、私のような絵の素人にも一目でミュシャだと分かる作風で、独特のロマンティックな華やかさがある。

堺にミュシャ館があるのは、ミュシャ作品の収集家の遺族が堺市に寄贈したことによることであつたが、堺市が与謝野晶子文芸館とアルフォンス・ミュシャ館を一つの建物の上下階に置いた発想もなんとなく分かるような気がする。

私としては、どちらも好きなので、大阪に行ったついでとはいえ、わざわざ訪ねたのに、いずれの館もあまりの閑散さに拍子抜けした。ミュシャの絵は、どのような経緯で飾られたのか知らないが、うちの大学の食堂にもある。そんなことから、現在の若い人たちにも好まれているのだろうと思っていたが、そうでもなかったのかな。まあ、静かに鑑賞できたのだから、文句を言う筋合いはないのだが.....